第十二章　明石の物語　一族の宿世

［第一段　東宮からのお召しの催促］

*宮より（皇太子から桐壺妃に）、とく参りたまふべきよしのみあれば（早く東宮に戻るよう頻りに督促があるので）、　*「宮」は東宮のこと、らしい。随分唐突な書き出しに見えるが、是で当時の読者は普通に読み進めたのだろうか。「参りたまふべきよし」とあれば、是が東宮から桐壺妃への参内の呼び出しだ、と分かった、ということだろうか。少し読み進めば、そういうことだと分かるだろうが、この文だけでは他の意味になる可能性があるように、私には見えてしまう。こうした唐突な書き出しは、この物語の随所にあって、それらに脱稿が無いとしたら、つくづく古文と現代語との構文概念の違いを思い知らされる。もし本当に脱稿がないのなら、各単語の分かり難さも然り乍ら、何よりもこの語り口の呼吸感や生活感の違いに戸惑うし、其処をこそ余ほど留意して読むべきかと改めて気付かされる。

「かく思したる（このように東宮がお思いになるのは）、ことわりなり（当然です）。めづらしきことさへ添ひて（お目出度があったのですから）、いかに心もとなく思さるらむ（どんなに気を揉んでいらっしゃることでしょう）」

と、*紫の上ものたまひて（母君格である紫の上も仰って）、若宮*忍びて参らせたてまつらむ御心づかひしたまふ（若宮を表沙汰にではなく隠して参内して頂くご配慮を為さいます）。　*「紫の上」は本文では久しぶりの呼称だ。「対の上」は六条院内での描写に使われ、「紫の上」は対外的な表示なのだろうか。「紫の上」は＜桐壺妃の母君＞としての立場を読者に印象付ける言い方に思えるので、それらしく補語して置くが、それでも、「紫の上」は公式な呼称ではない、のだろう。　*「忍びて」は＜公式な行列仕立てではなしに←目立たないように＞ということだろうが、それは結局＜隠して＞だ。

*御息所は（桐壺妃は）、御暇の心やすからぬに懲りたまひて（皇太子が里下がりを容易にお許し下されなかったことに懲りなさって）、かかるついでに（この際に）、しばしあらまほしく思したり（暫く六条院に留まりたいとお思いでした）。　*「御息所」は注に＜明石女御をいう。御子を出産したので、こう呼称する。＞とある。確かに、こうした語用は当時の常識ではあったらしい。若宮の＜御生母＞という言い方のようだが、「みやすどころ」の語意は天皇の御休み所だから＜御子を儲けて妻の座に納まった人＞みたいな語感だ。実態に即していて、この人と特定できて、何より此処では東宮との関係性に於いて人物説明するのが当時の作者と読者に共有された社会認識だったのだろう。ただ、「御息所」は公式の地位名称ではなく、あくまでも分かり易い呼称であったらしく、また現代人の私には、満 12 歳になったばかりの 13 歳の明石姫という視点が離れないので、まだ此処では＜桐壺妃＞と呼称して置く。因みに皇太子は 15 歳。

ほどなき御身に（まだ未熟な御身体で）、さる*恐ろしきことをしたまへれば（桐壺妃は出産という大事を成し遂げなさったので）、すこし面痩せ細りて（少し顔がやせ細って）、いみじくなまめかしき御さましたまへり（ぐっと大人っぽい御色気をなさっていらっしゃいました）。　*「恐ろしきこと」は＜心配事＞という言い方で、具体的には＜懐妊出産＞を指し、それは正に女の大事には違いない。確かに大掛かりな安産祈願の祈祷は挙げたようだが、実際には安産だったと、十章五段に「弥生の十余日のほどに、平らかに生まれたまひぬ」と語られていた。

「かく(御息所はこのように)、*ためらひがたくおはするほど(まだ持ち直していらっしゃいませんので)、*つくろひたまひてこそは(もう少し御静養なさってから、の参内がよろしいかと)」
*「ためらふ」は病状などが＜持ち直す＞。　*「つくろふ」は＜治療する、安静にする＞。

など、*御方などは心苦しがりきこえたまふを(御方などは気懸かりを申しなさったが)、大殿は(源氏殿は)、　*「御方など」の「など」には特に尼君の妃と若宮を手離したくない意向が強く感じられるが、尼君は表意出来ない立場なので、妃と若宮を取り巻く側近女房たち、くらいを補語しようかとも思ったが、結局「など」の曖昧表現以上の表現力は他の語には無さそうだ。

「かやうに面痩せて見えたてまつりたまはむも(このようにほっそりなさったお姿で春宮にお目にかかりなさるのも)、なかなかあはれなるべきわざなり(この時ならではの情が感じられものです)」

などのたまふ(と仰います)。

[第二段　明石女御、手紙を見る]

*対の上などの渡りたまひぬる夕つ方(対の上とその女房たちが東の対にお帰りになった夕方の)、しめやかなるに(静かな時分に)、御方(明石御方は)、御前に参りたまひて(桐壺妃の側へ参上なさって)、この文箱聞こえ知らせたまふ(入道からの文箱をお見せ申しなさいます)。　*「対の上など」の「対の上」は六条院内での指呼らしく、この「など」は＜上に連なる側近女房たち＞に違いない。

「思ふさまにかなひ果てさせたまふまでは(女御様が願い通りに事を収めあそばすまでは)、取り隠して置きてはべるべけれど(隠して置くべきと存じますが)、世の中定めがたければ(世の中何が急に起こるとも知れませんので)、うしろめたさになむ(それまでお待ち申すのが、不安になりまして)。

何ごとをも御心と思し(何ごとも天の思し召しなので)数まへざらむこなた(物の数ではない私などは)、ともかくも(何時何処とも無しに)、はかなくなりはべりなば(死んでしまいますので)、かならずしも今はのとぢめを(必ずしも臨終に)、御覧ぜらるべき身にもはべらねば(女御様にお立会い頂ける立場でも御座いませんので)、なほ(やはり)、うつし心失せずはべる世になむ(しっかりしている内に)、はかなきことをも(小さなことまでも)、聞こえさせ置くべくはべりける(お耳に入れ申し上げて置いたほうが良い)、と*思ひはべりて(と存じまして、此処にこの文箱をお持ち申しました)。　*「思ひはべりて」は校訂で此処に句点が打たれて、此処で御方が一呼吸置いた、と解されているらしい。従う。更に、蛇足なのかも知れないが、その一呼吸は文箱を紐解いて中から願文を取り出した時間と見て、是は下に＜かく文箱たてまつれり＞あたりが省かれている文だろう、と読んで置く。

むつかしくあやしき跡なれど(読み難い変な書体の筆跡ですが)、*これも御覧ぜよ(是も御覧下さい)。この願文は(このぐぁんぶみは)、近き御厨子などに置かせたまひて(身近な戸棚などに仕舞いあそばして)、かならず*さるべからむ折に御覧じて(必ず然るべき折に御覧になって)、このうちのことどもはせさせたまへ(此処に書かれた満願成就の御礼参りは為さいますように)。　*「これも」の「これ」は＜入道が書いた願文＞であり、「も」という類似列挙を示す助詞が使われているということは、

入道のもう少し分かり易い手紙はこの前に妃に見せたということを説明するもの、かと思う。 *「さるべからむ折」は入道の手紙に拠り、広義では「山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす」に従えば立后と立坊と若宮の即位の各折であり、狭義では「若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、果たし申したまへ」に従えば立后の折である。それぞれの事柄毎に願文は記されていたのだろう。

疎き人には(親しくない人には)、な漏らさせたまひそ(この事は知られなさいませんように)。かばかりと見たてまつりおきつれば(あと少しのところまで来たと拝し申せましたので)、みづからも世を背きはべなむと思うたまへなりゆけば(私自身も出家いたそうと存ずるに至りましたので)、よろづ心のどかにもおぼえはべらず(万事このままで居ようとは思っておりません)。

対の上の御心(対の上の御恩は)、おろかに思ひきこえさせたまふな(少しもお忘れなさいませぬように)。いとありがたくものしたまふ(滅多になくいらっしゃる)、深き御けしきを見はべれば(深いご親切を思いますと)、身にはこよなくまさりて(私よりはずっと)、長き御世にもあらなむとぞ思ひはべる(長生きして頂きたいと存じます)。

もとより(元々)、御身に添ひきこえさせむにつけても(私があなたのお側に御付き添い申し上げることに付いても)、つつましき身のほどにはべれば(遠慮すべき身分なので)、譲りきこえそめはべりにしを(親権を御譲り申し出しましたのですが)、いとかうしも(とてもこれほどまでも)、ものしたまはじとなむ(立派には御育て下さるまいと)、年ごろは(何年も)、なほ世の常に思うたまへわたりはべりつる(やはり世の常と同じに思い続けておりました)。

今は(今では対の上にお任せ申す事で)、来し方行く先(過去も未来も)、うしろやすく思ひなりにてはべり(安心できると思えるようになりました)」

など(などと御方は)、いと多く聞こえたまふ(とても多くの事を桐壺妃にお話し申しなさいます)。涙ぐみて聞きおはす(妃は涙ぐんでお聞きあそばします)。かくむつましかるべき御前にも(この本来は睦まじくしていて当然の実の子の妃の御前でも)、常にうちとけぬさましたまひて(御方は常に威儀を正していらっしゃって)、わりなくものづつみしたるさまなり(行き過ぎなほどに遠慮深くする態度なのでした)。

この文の言葉(入道の手紙の文面は)、いとうたて*こはく(とても畏まって堅苦しく)、憎げなるさまを(親しめないものだったが)、*陸奥国紙にて(みちのくにがみにて)、年経にければ(年数が経ったもので)、黄ばみ厚肥えたる五、六枚(黄ばんで水分で厚く膨らんだ五、六枚に)、さすがに香にいと深くしみたるに書きたまへり(そうはいっても香をとても深く染み込ませたものにお書きになっていました)。 *「こはし」は「強し」で<堅苦しい>。 *「陸奥国紙」は「檀紙」と同じとあり、「檀紙(だんし)」は<和紙の一。楮(こうぞ)を原料とし、縮緬(ちりめん)状のしわがある上質の和紙。>と大辞泉にある。

いとあはれと思して(桐壺妃はこの実母一家の生き方が紛れもなく自分の一部と知り、とても深く感じ入りなさって)、御額髪のやうやう濡れゆく(読むほどに御額髪が涙に濡れ行く)、御側目、あてになまめかし(その御横顔が上品で艶があります)。

［第三段　源氏、女御の部屋に来る］

院は（源氏殿は）、姫宮の御方におはしけるを（姫宮の御部屋にいらしたが）、中の御障子よりふと渡りたまへれば（母屋の中襖を引き開けて東側に急にお出でなさったので）、えしも引き隠さで（明石御方は入道の文箱を引き隠すことが出来ずに）、御几帳をすこし引き寄せて（御几帳をすこし引き寄せて）、みづからははた隠れたまへり（自身の姿を隠しなさいました）。

「若宮は、おどろきたまへりや（若宮はお目覚めでいらっしゃいますか）。時の間も恋しきわざなりけり（ちょっとの間も恋しいものですから）」

と聞こえたまへば（と殿はお尋ねなさいますが）、御息所はいらへも聞こえたまはねば（妃はお応えも申しなさらないので）、御方（御方が）、

「対に渡しきこえたまひつ（対に上がお連れになりました）」

と聞こえたまふ（と応えなさいます）。

「いとあやしや（それは怪しい）。あなたにこの宮を領じたてまつりて（あちらで宮を女子のように囲い申して）、懐をさらに放たずもて扱ひつつ（懐深くに隠し申して）、*人やりならず衣も皆濡らして（上は下の御世話も人任せにせず自分の着物もすっかり濡らして）、脱ぎかへがちなめる（無駄に脱ぎ変えてばかりいる溺愛ぶりなのでしょう）。軽々しく（若宮は慰みものではいらっしゃらないのだから、軽々しく）、などかく渡したてまつりたまふ（どうしてこのようにあなたは宮をお渡し申しなさるのです）。こなたに渡りてこそ見たてまつりたまはめ（上こそ此方に来て御世話申し上げなさるべきなのです）」　*「人やりならず」は＜他人から遣らされるのではなく自分から進んで遣ること＞と古語辞典にある。また此処の文意は＜かってに好き好んで若宮のおしっこで衣裳をすっかり濡らしているという意。＞と注にある。であれば、此処の「人やりならず」は＜女房任せにせず、上が自身で＞と読んだ方が面白そうだ。が、それの何処が「いとあやし」なのか。恐らくだが、そのように身近に世話して勝手に手懐けるのは、何か密かな思惑があるからで、その思惑は自分の計画を害するものかも知れない、という疑い、みたいなことだろうか。ざっと、帝位を狙う若宮の養育に付いて、上の勝手な判断は許さない、という殿の思い、とも読める。明石姫の養育はすっかり紫の上に任せていたというのに、殿にどういう心境の変化があったのか。姫宮を可愛がった後だけに、上の嫉妬を恐れた、とかいう心理状態は有り得るかも知れない。また単に、若宮に会いに来た殿が、会えなかったので、当てが外れた苛立ちの弁、ということかも知れない。上への敬語の無さも妙に気になる。しかし、何れにせよ何かそれらしい説明も特には無いので、とても文脈を拾い難い語り口だ。

とのたまへば（と殿が仰ると）、

「いと（何て）、うたて（ひどい）。*思ひぐまなき御ことかな（万事御見通しみたいな言い方ですね）。　*「思ひぐまなし」は「思ひ隈なし」と漢字表記されるようだ。この漢字表記がこの語の成立を正しく示しているなら、「思ひぐまなし」は＜隈なき考え＝分からないことが無い知識＝全てお見通しの賢さ＞という語意だ。訳文では＜思い遣りが無い＞とされており、「御見通し」を＜一方的な思い込み＞と考えれば＜独りよがりの思い遣りの無さ＞という意味合いも成立するように見えるが、此処では「御見通し」と取って置く。

*女におはしまさむにだに(宮が深窓で人目を避けるべき女子でいらっしゃってさえ、養祖母でいらっしゃる対の上が)、あなたにて見たてまつりたまはむこそよくはべらめ(あちらの東の対に連れ出しなさって御世話申しなさるのに何の不都合もありません)。まして男は(まして宮は男子であってみれば)、限りなしと聞こえさすれど(敬われるべき御身分とは申しあそばされても)、心やすくおぼえたまふを(多くの人目に付きなさるのも気兼ねは要らないと思われ為さいますものを)。戯れにても(冗談にも)、かやうに隔てがましきこと(そのように疎外めいたことを上に対して)、なさかしがり聞こえさせたまひそ(分かった風に申しあそばされませんように)」　*「女におはしまさむにだに」は注に＜「女に--だに--まして--男は」という構文。女は他人に見られてはならないものだが、紫の上は母の養母だからかまわない、まして、男御子はなおさら差し支えないという意。＞とある。

と聞こえたまふ(と御方は申しなさいます)。うち笑ひて(殿は笑って)、

「御仲どもにまかせて(若宮のことはあなたがた御二人に任せて)、見放ちきこゆべきななりな(私は関わり申さない方がよろしいようですね)。隔てて(壁を作って)、今は、誰も誰もさし放ち(今は誰も彼もが私を拒んで)、さかしらなどのたまふこそ幼けれ(小賢しいなどと仰るそちらこそ子供じみてますよ)。まづは(現に今だって)、かやうにはひ隠れて(そのように几帳の後ろに身を隠して)、つれなく言ひ落としたまふめりかし(邪険に人を悪く言い為さっているようだ)」

とて(と言って)、御几帳を引きやりたまへれば(御几帳を引き退けなさると)、母屋の柱に*寄りかかりて(母屋の柱に半分身を隠して)、いときよげに(とてもこざっぱりとしたなりで)、心恥づかしげなるさましてものしたまふ(気が引けるほどきちんと畏まって明石御方が座っていらっしゃいます)。　*「寄りかかる」は＜もたれかかる＞のではないように思う。尼君ならともかく、御方は妃の御前では「常にうちとけぬさましたまひて、わりなくものづつみしたるさまなり」とその姿勢が説明されたばかりだ。少し強引気味だが、この「寄りかかる」は＜柱の側でその蔭に掛かって身が隠れるように＞と読みたい。

［第四段　源氏、手紙を見る］

ありつる箱も(妃の御前に出してある文箱も)、惑ひ隠さむもさま悪しければ(慌てて隠すのも行儀が悪いので)、さておはするを(そのままにしていらっしゃるのを)、

「なぞの箱(それは謎の箱ですね)。深き心あらむ(深い訳がありそうだ)。懸想人の長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ(あなたの色男が恋心を長歌に読んで大事に遣したものじゃないんですか)」

とのたまへば(と殿が仰ると)、

「あな(あら)、うたてや(いやだ)。今めかしくなり返らせたまふめる御心ならひに(姫宮のお相手で若返りなさった御心のままに)、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ(思いも寄らない御戯れも)、時々出で来れ(また出て来ました)」

とて(と言って)、ほほ笑みたまへれど(御方は微笑みなさいましたが)、ものあはれなりける(如何にも感激しているような)*御けしきどもしるければ(妃と御方のご様子がはっきりと見て取れ

たので)、あやしとうち傾きたまへるさまなれば(殿は何かあると勘繰りなさるので)、わづらはしくて(御方はあらぬ詮索を受けるのも面倒なので)、　*「御けしきども」は注に＜明石御方と女御の態度。接尾語「ども」複数を表す。＞とある。

「かの明石の岩屋より(これは明石の父から)、忍びてはべし御祈りの(内々で致しました御祈祷での)*巻数(くゎんじゅ、経文目録や)、また(その他には)、まだしき願などのはべりけるを(まだ成就していない願文などがあちらに残っておりましたものを)、御心にも知らせたてまつるべき折あらば(女御の御心にもお知り頂ける折があれば)、御覧じおくべくやとてはべるを(御覧頂いて置きたいと送ってきたもので)、ただ今は(今のところは)、ついでなくて(時機を得ないので)、何かは開けさせたまはむ(まだ妃は中を御覧あそばしません)」　*「巻数(くゎんじゅ)」は＜僧が願主の依頼で読誦(どくじゅ)した経文・陀羅尼(だらに)などの題目・巻数・度数などを記した文書または目録。木の枝などにつけて願主に送る。＞と大辞泉にある。弁護士などの法曹人が適用法令の条文番号を読み上げるようなものだろうか。いかにも御題目だが、実施記録としての＜経文目録＞と見て置く。

と聞こえたまふに(と申しなさると)、「げに(なるほど、それでは確かに)、あはれなるべきありさまぞかし(感激に浸るのも無理はない)」と思して(と殿はお思いになって)、

「いかに*行なひまして住みたまひに*たらむ(どれ程の修行を積みなさってその岩屋暮らしに耐え為さっているのだろう)。　*「行なひます」の「行ひ」は＜仏道修行＞で、「ます」は尊敬の助動詞。　*「たる」は「足る」で＜条件を満たす＞。此処での「足る」は、御方の言う「岩屋」を受けて、その厳しい山寺暮らしに＜耐えられる＞という意味だろう。

*命長くて(長生きで)、ここらの年ごろ勤むる*罪も(それだけ多くの年月を修行なさった積み重ねの功徳は)、こよなからむかし(この上ない利益をもたらすだろう)。　*「命長し」は＜長生きで居るさま＞。　*「つみ」は「罪」ではなく「積み」と読む。

世の中に(世の中で)、よしあり(教養があって)、*賢しき方々の(知識も豊富だと言われている高僧たちを)、*人とて見るにも(入道殿と比べてみると)、この世に染みたるほどの*濁り深きにやあらむ(俗世に染まった現世利益の欲深さがある所為か)、賢き方こそあれ(経文解読の学問には優れていても)、いと限りありつつ及ばざりけりや(その潔さは限定的で入道殿には及ばないようだ)。　*「さかしきかたがた」は注に＜主として僧侶をさす。＞とある。　*「人とて」の「とて」は、基準を示す格助詞の「と」に、条件提示の接続助詞「て」が付いたもので、基準とされる「人」＜として＞という言い方。で、この「人」は＜入道殿＞であり、他の人を＜入道殿として見る＞ということは＜入道殿と比べてみる＞ということだ。　*「にごり」は、ざっと＜欲＞だろうが、「この世に染みたるほど」は自分の出世や贅沢な暮らしという＜現世利益＞のことなのだろう。ただ、入道は収入が無かったわけではなく、高収入を自分の食い潰しで散財したのではなく、娘の玉の輿のために投資したのだから、それは使途上の価値観の違いなのであって、傍目には十分に＜現世利益＞を得ていた、と私は思う。

さもいたり深く(入道殿はいかにも覚悟が深く)、さすがに(それにも関わらず)、けしきありし人のありさまかな(風雅の素養を備えた人となりだった)。聖だち(聖人らしい)、この世離れ顔に

もあらぬものから(超然とした表情ではないものの)、下の心は(内心には)、皆あらぬ世に通ひ住みにたるとこそ(すっかり冥土を通い知って達観していると)、見えしか(思えたものです)。

　まして今は心苦しきほだしもなく(まして今は若宮の御生誕を見て気懸かりな現世への足かせも無く)、思ひ離れにたらむをや(存分に仏道に没頭なされるだろう)。かやすき身ならば(私が気軽な身でいたならば)、忍びて(少ない手勢の微行で)、いと会はまほしくこそ(それは会いたいものだが)」

　とのたまふ(と仰います)。

　「今は、かのはべりし所をも捨てて(今はあの住んでいた所さえも捨てて)、*鳥の音聞こえぬ山にとなむ聞きはべる(鳥の声もしない山奥へ籠もったと聞いております)」　*「鳥の音聞こえぬ山」は注に＜「飛ぶ鳥の声も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（古今集恋一、五三五、読人しらず）の文句を踏まえる。＞とある。

　と聞こゆれば(と御方が申し上げると)、

　「さらば(それでは是は)、その遺言ななりな(その入山に際しての書き置きなんですね)。消息は通はしたまふや(返事はお出しになりましたか)。尼君、いかに思ひたまふらむ(尼君は如何思っておいででしょう)。親子の仲よりも、またさるさまの契りは、ことにこそ添ふべけれ(親子の仲より夫婦の縁は多くの出来事があるものですから)」

　とて(と言って)、うち涙ぐみたまへり(殿は涙ぐまれました)。

［第五段　源氏の感想］

　「年の積もりに、世の中のありさまを、とかく思ひ知りゆくままに(年を重ねて世の中の有様を色々と知るほどに)、あやしく恋しく思ひ出でらるる人の御ありさまなれば(特に印象深く思い出される入道殿の生き様なので)、深き契りの仲らひは(深く結ばれた御夫婦仲では)、いかにあはれならむ(尼君は入道殿との別れをどんなに悲しまれる事だろう)」

　などのたまふついでに(などと殿が仰っている時に)、「この夢語りも思し合はすこともや(父入道の夢語りに殿も思い当たりなさる事があるかも知れない)」と思ひて(と御方は思って)、

　「いとあやしき*梵字とかいふやうなる跡にはべめれど(とても変な梵字とか言うような文字に見える分かり難い筆跡ですが)、御覧じとどむべき節もや混じりはべるとてなむ(殿のお目に止まるようなことも書かれて居りましょうか)。*今はとて別れはべりにしかど(今が潮時と父は山奥へ別れ去ってしまいましたが)、なほこそ(それでもこの文面には)、あはれは残りはべるものなりけれ(満願成就の願いが今も果たせないまま残っています)」　*「梵字(ぼんじ)」は、ざっと古代インド文字らしい。古代インド語で書かれた仏典原書を記した文字ということのようで、漢字とは全く違う表音文字らしく、文字の形から具象概念が推し量れず、成り立ちの手掛かりも得られぬままに、その珍しさと分かり難さと仏典の有難さとが相俟って、独特な印象のある字形とされたのだろう。入道ならいくらかは読み書きが出来たかも知

れない、ということに引っ掛けた言い方だろうが、本当に梵字で書かれた手紙なら尼君や御方や桐壺妃は勿論の事、源氏殿にも恐らく読めない。だから是は、分かり難い文字の筆跡のこと、の例えだ。　*「今はとて別れはべりにし」の主語は入道なのだろう。十一章一段に「今なむ、この世の境を心やすく行き離るべき」と入道の決心が語られていたし、同四段には使者の大徳の報告として「今はとてかき籠もり、さるはるけき山の雲霞に混じりたまひにし」と入道の入山の様子が語られていた。

とて(と入道の手紙を取り出して)、さまよくうち泣きたまふ(姿勢を崩さずにお泣きなさいます)。寄りたまひて(殿は近付いて手紙をお読みになり)、

「いとかしこく(実に明晰で)、なほほれぼれしからずこそあるべけれ(少しも呆然としていないようだ)。手なども(筆跡も)、すべて何ごとも(他の何ごとに於いても)、わざと有職にしつべかりける人の(入道殿は作法を心得て出来る人で)、ただこの世経る方の心おきてこそ少なかりけれ(ただ世渡りの作法にだけは疎かったようだ)。

*かの先祖の大臣は(入道殿の先祖の大臣は)、いとかしこくありがたき心ざしを尽くして(とても賢明で優れた政務を執って)、朝廷に仕うまつりたまひけるほどに(帝に御仕え申しなさっていた時に)、*ものの違ひめありて(政変での失脚があって)、その報いにかく末はなきなりなど(その報復人事で子供たちの栄達は無いだろうと)、人言ふめりしを(世間では言ったようだが)、女子の方につけたれど(男子の出世ではなく、女子の方の縁組に拠ってだが)、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも(一族にこのように高位を継ぐ者が無いでもないのは)、そこらの行なひのしるしにこそはあらめ(入道殿の長年の読経上げの成果に違いない)」　*「かのせんぞのおとど」は注に＜明石入道の先祖は大臣であるというが、源氏の母桐壺更衣の父君はその弟の按察大納言、同祖でもある。「若紫」「明石」参照。＞とある。桐壺更衣が入道の従兄妹に当たる事は須磨巻三章六段に「故母御息所は、おのが叔父にものしたまひし按察使大納言の御娘なり。」と入道の口から夫人に、光君と明石君の結婚について自家の家柄の正統性を説く場面で語られていた。また、明石巻二章六段に「親、大臣の位を保ちたまへりき」と是も入道の口から、光君にする過去の事情説明の一環で語られていた。因みに、明石巻を流し読み返して二章三段に「年は六十ばかりになりたれど」という記事を見た。それが、光君 27 歳の時とは今を遡る十四年前の事だから入道は今年で 74、5 歳くらい、ということになる。　*「もののたがひめ」は＜何かの行き違い＞みたいな言い方だが、「違ひ目」は＜負い目＝不利な局面＞であり、源氏殿の失脚時を思い合わせれば、恐らく是は＜政争に敗れた失脚＞で、勝者を悪く言わない為の曖昧表現に見える。

など(などと言って)、涙おし拭ひたまひつつ(涙を押し拭いつつ)、*この夢のわたりに目とどめたまふ(入道の夢語りの行に目を止めなさいます)。　*「この夢のわたり」は＜入道の手紙にある夢物語の行＞のことだが、「夢のわたり」という言い回しは＜「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡しつつ物をこそ思へ」（河海抄所引、出典未詳）＞を下敷きにしているとの指摘が注にある。

「あやしくひがひがしく(並外れたひねくれ者で)、すずろに高き心ざしありと人も咎め(手掛かりも無い雲を掴むような高い望みを追っていると入道殿を世間も非難し)、また我ながらも(また私自身にしても)、*さるまじき振る舞ひを(京にいたなら、有り得ないあなたとの結婚を)、仮にてもするかな(謹慎中の明石での、仮寝とは言えしてしまうのか)、と思ひしことは(と行く末に一抹の不安を抱いた事は)、この君の生まれたまひし時に(この女御の君がお生まれになった時

に)、契り深く思ひ知りにしかど(あなたとの仲は一時の気まぐれではない深い縁なのだと思い知りましたが)、目の前に見えぬあなたのことは(当時は分からなかったこの若宮を得た歓びを見ることには)、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ(その実現に不安を抱き続けてきたものだが)、さらば(是を読むと)、かかる頼みありて(入道殿にはこうした夢見から信心の拠り所があって)、あながちには望みしなりけり(強く私たちの結婚を望んでいたのだな)。　*「さるまじき振る舞ひ」は＜源氏殿と明石御方との結婚のこと＞らしい。是を殿は、明石御方を前にして言う訳だが、私には御方に対して随分失礼な言い方に見えるが、当時の社会認識とそれぞれの立場からすると妥当な言い方なのかも知れない。が、それにしても、もう少し分かり易い言い方は無いものか。

*横さまに(無実の謀反の罪で)、いみじき目を見(ひどい目に遭って)、ただよひしも(流浪したのも)、*この人一人のためにこそありけれ(この入道殿一人の夢見の所為だったに違いない)。いかなる願をか心に起こしけむ(どんな願文を思い立ったのだろう)」　*「横さま」は「無実の罪、冤罪」と訳されている。殿がその心算で言っているのは確からしいので、従いたい。が、客観的には＜冤罪＞は証明されていない。源氏殿は、旧右大臣家で発覚した不倫に付いて、自身は藤原六姫と色好みの情交しただけで謀反の心算など毛頭無い、と自己弁護を主張するのだろうが、六姫は尚侍であって、尚侍は半公式の帝の妃であり、是に手を出すは直ちに政府転覆を意味せずとも朝廷の混乱は必定の大事件に違いない。是が断罪されなかったのは、朱雀帝の意向も然り乍ら、何よりも右大臣家が六姫可愛さにその地位保全を図り、騒ぎも程々に事態収拾に動いたからに他ならない。源氏殿は赦されたのではなく、不問に付されていたに過ぎない。それが復権できたのは、故桐壺院による朱雀帝への御諭しとも語られていたが、その客観的な説得力としては、都での天変地異と右大臣家の不幸続きとそれらによる政情不安を収拾するための奥の手として、朱雀帝が源氏殿を呼び戻した、という説明だった。　*「この人一人のため」は注に＜『集成』は「入道一人の祈願成就のためだったのだ」。『完訳』は「この人ひとりがお生れになるためだったのです」と訳す。＞とある。確かに分かり難い。ただ、この場には桐壺妃自身も居るので、本人を前に「いみじき目を見、ただよひしも」という恩着せがましさは若宮の王家の誇りに障る気がするので、私は「この人」を＜入道＞と読む。「ため」は＜利する＞ではなく＜所為＞。「こそありけれ」は＜～に違いない＞。

とゆかしければ(と殿は興味を覚えて)、心のうちに拝みて取りたまひつ(心の中で手を合わせて入道の願文を文箱から取り出しなさいます)。

[第六段　源氏、紫の上の恩を説く]

「これは(この願文には)、また具してたてまつるべきものはべり(さらに加え揃えて奉納すべき私の願文が他にあります)。今また聞こえ知らせはべらむ(それはまたいつかお見せ申します)」

と(と殿は)、女御には聞こえたまふ(桐壺妃には申しなさいます)。そのついでに(そして続けて)、

「今は、かく、いにしへのことをもたどり知りたまひぬれど(今はこのように昔の御自分の出生に付いても元をたどり知りなさいましたが)、あなたの御心ばへを(実母ではないにせよ養母である、あちらの養母君の御恩を)、おろかに思しなすな(お忘れなさいますな)。もとよりさるべき仲(もともと親しくて当然の夫婦の仲や)、えさらぬ睦びよりも(避けられない兄弟の縁よりも)、*横さまの人のなげのあはれをもかけ(縁の無い他人が形ばかりの同情であってさえ掛けてくれ

て)、一言の心寄せあるは(一言でも慰めてくれるのは)、おぼろけのことにもあらず(当たり前にある普通の事ではありません)。　*「横さまの人のなげのあはれ」は「横さまの人」の「無げのあはれ」と読むらしい。で、「横さまの人」は＜横に居る人→たまたま横に居た人→元々の縁は無い人＞。「無げのあはれ」は＜気の無さそうな形ばかりの同情＞。

まして、ここになど(まして此処にこうして実母である御方が)さぶらひ馴れたまふを見る見るも(仕え馴れていらっしゃるのを見るにつけても)、初めの心ざし変はらず(初めからの優しさは変わらず)、深くねむごろに思ひきこえたるを(深く愛しいと思い申しているのだから)。

いにしへの*世のたとへにも(昔のよくある継母子の例を見ても)、*さこそはうはべには育みけれと(そこそこ上辺は繕って一通りは育てたものと)、*らうらうじきたどりあらむも(継子が継母を分別を持って納得するのも)、賢きやうなれど(良い考え方のようだが)、なほあやまりても(むしろ誤りであっても)、わがため下の心ゆがみたらむ人を(身勝手で意地悪する継母を)、さも思ひ寄らず(そうとも気付かず)、*うらなからむためは(継子が素直で居れば)、引き返しあはれに(継母はこれはいけないと考え直して)、いかでかかるにはと(何でこんな事をと)、罪得がましきにも(罪に思って)、思ひ直ることもあるべし(反省する事もあるでしょう)。　*「よのたとへ」は与謝野訳文に＜継母話＞と補語されている。とても分かり易く参考になる補語だ。　*「さこそはうはべには育みけれ」を「こそ」を使わずに言い換えると＜さもうはべには育みけりや＞だろうか。是は継母の継子の育て方の一例、なのだろう。　*「らうらうじ」は＜可愛らしい、美しい＞または＜物慣れた、巧みだ＞。「たどり」は＜元を遡ること＞または＜物事の意味を知る事＞。で、この「たどり」は継子が継母の育て方を成人した後から遡って見直してみて下した＜評価→納得＞と取る。で、「うはべには」を客観的で醒めた限定的評価の言い方と見て、「らうらうじ」は＜世慣れた→分別のある＞と取る。　*「うらなし」は＜疑わない、安心している→素直で居る＞。「ためは」の「ため」は＜そのこと、その場合＞と上の事柄を特に強調して下の叙述に理由立てる副詞語用で、省かれても文意は通るものかと思う。「ためは」は、ほぼ＜その上は＞だ。

おぼろけの昔の世のあだならぬ人は(普通の昔話にある薄情ではない継母子は)、違ふ節々あれど(行き違いがあっても)、ひとりひとり罪なき時には(互いに悪意が無ければ)、おのづからもてなす例どもあるべかめり(自然に仲直りする例が多く在るようです)。さしもあるまじきことに(しかし、大した事でも無いことに)、かどかどしく癖をつけ(口煩く小言を言い)、愛敬なく(優しさが無く)、人をもて離るる心あるは(親しくしない継母は)、いとうちとけがたく(継子もとても懐けず)、思ひぐまなきわざになむあるべき(思い遣りのない接し方なのでしょう)。

多くはあらねど(多くはないが)、人の心の(女の気立ての)、とあるさまかかるおもむきを見るに(表われる態度や漂う雰囲気を見るに)、ゆゑよしといひ(教養や作法に)、さまざまに口惜しからぬ際の心ばせあるべかめり(それぞれ貴族らしい心得はあるようで)、皆おのおの得たる方ありて(皆色々な長所があって)、取るところなくもあらねど(見るべき所は無くもないが)、また、取り立てて(かといって、また取り立てて)、わが後見に思ひ(私の補佐として)、まめまめしく選び思はむには(真剣に選ぼうとすれば)、ありがたきわざになむ(見当たらないものです)。

ただまことに心の癖なくよきことは(ひたすら真に素直で良い人は)、この対をのみなむ(この対の上だけで)、これをぞおいらかなる人と*いふべかりける(この人こそを穏やかな人と言うべ

きなのだった)、となむ思ひはべる(と思います)。　*「いふべかりける」の過去を示す助動詞「けり」は、その過去の事象またはその意味を、今気付いた、という詠嘆の語用なのだろう。そのように、殿が紫の上を再評価した事で、改めて新妻の姫宮の事を考える、という流れで下の文に続く、ように思う。

*よしとて(しかし、いくら素直と言っても)、またあまり*ひたたけて頼もしげなきも(その反面であまりに何ごとにも無頓着で頼りにならないのも)、いと口惜しや(また残念だ)」　*この文意について、注には＜暗に女三の宮のことをいう。＞とある。桐壺妃の継母の話題にしては、姫宮は新妻であり、妃の二歳年上に過ぎず、いや、むしろ妃よりも子供じみているように語られてきたので、此処に姫宮の話が出るのには些か唐突感がある。が、直前の文で、殿が上を再評価した事で、その対比として姫宮が思われた、という殿の発想のままに此処の文は語られているのだろう。そういう会話文の所為か、全体に此処の文は難文だ。　*「ひたたく」は＜雑然とする、締まり無く乱れている＞と大辞泉にある。此処では＜無頓着、構わない＞と取りたい。

と*ばかりのたまふに(とだけ仰ったが)、*かたへの人は思ひやられぬかし(明石御方には上と対比されたもう一方の人が姫宮だと知れたことでしょう)。　*「ばかり」といっても、全体は随分と長台詞であり、この「ばかり」は最後の「よしとて、またあまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」だけを指しているように見える。　*「かたへ」は大辞泉に＜かたわら。そば。＞とあり＜対になっているものの一方。片方。片側。＞ともある。が、「かたへ」が＜かたわら＞なら「かたへの人」は＜明石御方＞だろうし、「かたへ」が＜もう一方＞なら「かたへの人」は＜姫宮＞だろうし、是だけではどちらかは分かり難い。が、「思ひやられぬ」は＜「思ひ遣る(推量する)」の未然形＋「る(受身の助動詞)」の連用形＋「ぬ(完了の助動詞)」の強調語用＞で＜対象に想定されてしまった＞という言い方なので、「かたへ」は＜もう一方＞であり、「かたへの人」は＜姫宮＞で、聞き手の明石御方は当然の配役として省筆された、のだろう。

[第七段　明石御方、卑下す]

「そこにこそ(あなたにこそ)、すこしものの心得てものしたまふめるを(少しものを分かっていらっしゃるようなので)、いとよし(とても良い事で)、睦び交はして(上と親しくして)、この御後見をも(この妃の御世話も)、同じ心にてものしたまへ(同じ気持ちで為さってください)」

など(などと殿は御方に)、忍びやかにのたまふ(小声で仰る)。

「のたまはせねど(仰らずとも)、いとありがたき御けしきを見たてまつるままに(とても有難い上の御意向を拝し申し上げながら)、明け暮れの*言種に聞こえはべる(いつも感謝しています)。*「言種(ことぐさ)」は＜話題、口ぐせ＞と古語辞典にある。「聞こえはべる」は、誰かに話すのではなく、心の中で言うのだろうから、「言種に聞こえはべる」は＜有難いと申し上げる→感謝しています＞だ。

*めざましきものになど思しゆるさざらむに(上が私を目障りな者と思いお許しなさらなければ)、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを(このように妃が私を御見知り置かれ下さる事もなかったものを)、かたはらいたきまで数まへのたまはすれば(恐縮するほどお引き立て頂きまして)、かへりてはまばゆくさへなむ(却って気恥ずかしくなります)。　*「めざましきもの」は注に＜明石御方自身をさしていう。＞とある。分かり難い対象主格語の省略だ。「思しゆるさざらむ」の主語省略は敬語があるのと話題の文脈から、この主語が紫の上らしいことは何とかたどれる気がするし、そこから「めざましきもの」の対象格

を逆推すると、これが御方自身らしいと理屈で気が付くが、読み進むままに意味が分かるほど、この語りの息遣いに馴染めない。会話文の当時性で、余計に同時代の読者以外には分かり難いのだろう。

数ならぬ身の(取るに足らない私が)、さすがに*消えぬは(それでも妃のお側に、居座るのは)、世の聞き耳も(世間の噂も)、いと苦しく(とても厳しく)、つつましく思うたまへらるるを(畏れ多く存じられますのを)、罪なきさまに(問題ないと)、*もて隠されたてまつりつつのみこそ(上に庇われて御恩に着させて頂くばかりです)」　*「消ゆ」は＜死ぬ＞と訳文では取られているようだが、此処では＜姿を消す、この場を去る＞という意味、と私は取る。 *「もて隠されたてまつりつつ」は＜「もて隠す(隠す)」の未然形＋「る(受身の助動詞)」の連用形＋「たてまつる(謙譲会話語の補助動詞、させて頂く)」の連用形＋「つつ(反復継続を示す接続助詞)」の専念強調語用＞という文法構成の、御方が主語の＜庇われ御恩に着させて頂く＞という言い方なのだろう。

と聞こえたまへば(と申しなされば)、

「その*御ためには(そのようにあなたから感謝されるために)、何の心ざしかはあらむ(何も上はあなたを庇ったのではないでしょう)。　*「御ため」の「御」は御方への敬語で＜あなたの謝意＞を意味するのだろう。こういう敬語遣いは却って距離感を感じさせる。上の「心ざし」に「御」がないのが、むしろ親近感というか身内感を思わせる。

ただ、この御ありさまを(ただ妃の御世話を)、うち添ひてもえ見たてまつらぬおぼつかなさに(ずっと付き添って見て差し上げられないのが気懸かりで)、譲りきこえらるるなめり(その役をお任せ申しなさったのでしょう)。

それもまた(あなたもまた)、とりもちて(取り立てて)、*掲焉になどあらぬ御もてなしどもに(妃の実母だという事を示さない御態度なので)、よろづのことなのめに目やすくなれば(万事が穏やかに体裁よく収まって)、*いとなむ思ひなくうれしき(とても嬉しく思っています)。　*「掲焉(けちえん)」は＜目立つ、明示する＞という形容動詞。何を＜明示する＞のかと言えば、御方が自分を桐壺妃の実母だと周囲に言う事、をだ。 *「いとなむ思ひなくうれしき」は強調の係助詞「なむ」を使わなければ＜いと嬉しく思ひぬ＞だろうか。語感としては全体で何となく意味の分かる言い回しで、「いとなむうれしき」は「なむ」と先に形容対象を終止形で示されているので、その形容内容の「うれし」が連体形で結ぶのは理屈も語感も分かり易いが、対象体を「思ひなく」と言うのは分かり難い。「思ひなく」の文法構成は＜「思ふ」の連用形＋「ぬ(現在完了の助動詞)」の未然形＋「く(名詞化助詞)」＞ということのようだが、「ぬ」の連体形は「ぬる」なので＜いとなむ思ひぬるにうれしき＞と言っても良さそうに思うが、確かに語感上では＜なむ～なく～文末連体形＞が定型化して安定いるような説得力がある。いや、だから、そういう文型なのだと覚えれば言いのかも知れないが、辞書には「なむ」や「く」の項目にそうした説明は無い。だから、この場合はそう考えて置く、という言い方になる。

はかなきことにて(一寸した事で)、ものの心得ずひがひがしき人は(世の中の成り立ちを心得ずに変に我を張る人は)、立ち交じらふにつけて(女房仲間の付き合いで)、人のためさへからきことありかし(相手まで巻き込んで問題を起こす事があります)。さ直しどころなく(そのような直すべき問題も無く)、誰もものしたまふめれば(どちらも心得ていらっしゃるので)、心やすくなむ(私は安心です)」

とのたまふにつけても(と殿が仰るにつけても)、

「さりや(やはり殿は上を正室と御思いだ)、よくこそ卑下しにけれ(私は今まで控え目にして来て良かったのだ)」

など(などと御方は)、思ひ続けたまふ(思い続けなさいます)。対へ渡りたまひぬ(殿は対にお帰りになりました)。

[第八段　明石御方、宿世を思う]

「さも(あのように殿は上に)、いとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな(もうこの上なく高い御評価が増すばかりのようだ)。げにはた(確かにまた上は)、人よりことに(人に抜き出て)、かくしも具したまへるありさまの(才色兼備でいらっしゃるので)、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ(それも当然の事と思われるほど尊い方です)。

*宮の御方(姫宮は)、うはべの御かしづきのみめでたくて(上辺の御持て成しこそ尊く敬われているが)、渡りたまふことも(殿がお出向きなさるのも)、えなのめならざめるは(普通より少な目なのは)、かたじけなきわざなめりかし(もったいなくも思われます)。同じ筋にはおはすれど(上と姫宮は同じ王家筋ではいらっしゃるが)、*今一際は心苦しく(姫宮がもう一段高いご身分なだけにより畏れ多く、その御不便は更に一段とお労しい)」　*「宮の御方」は姫宮だろうが、姫宮を＜御方＝お部屋様＞と呼ぶのは六条院内の一般的認識なのだろうか。この呼び方は初めてに思うし、今さっき語られた殿の評価で、改めて対の上が第一夫人だと知らされた事を受けての御方がする姫宮の呼び方にも思うが、どうなのだろう。明石御方の立場では他に呼び方が無いのだろうか。私は当面、姫宮で通したい。　*「今一際は心苦しく」は多分、当時の女房言葉での陰口の定番、定型句だったような語感だ。「今一際」という語は＜もう一段高い身分＞を意味するし、一般的な＜更に一段と＞という言い方でもある。「心苦し」は大辞林に＜上代には、自分に対してつらいと感ずるさまを表したが、平安時代には他人の身を思いやって心が痛む場合にも用い、また、相手がつらいと感ずる状態にある、気の毒だ、いたわしい、の意も生じた。＞と解説があり、相手の高い身分に対しては自分が＜恐縮する＝畏れ多い＞という意味になり、その高い身分の人の不幸は普通よりも＜更に一段といたわしい＞という意味にもなる、という遊び気分の洒落た掛詞になっているのだろう。

と*しりうごちきこえたまふにつけても(と御方は桐壺妃にこの六条院の女主人の座をめぐる状勢の、陰口を申しなさりながら)、わが宿世は(自分の運勢は)、いとたけくぞ(とても強いものだと)、おぼえたまひける(次のように内心で、思われなさいました)。　*「しりうごち」は「後言つ(しりうごつ、陰口を言う)」の連用形。「後言つ」は「後言(しりうごと、後ろで言う話し・陰口・悪口)」の動詞化と古語辞典に説明されている。「しりうごと(しりゅうごと)」という発音は「しりへごと(後方言)」の音便だろうか。その説明は辞書に無い。

「やむごとなきだに(上や姫宮のように、高貴な王家血筋の方でさえ)、思すさまにもあらざめる世に(思うようにもならないような源氏殿との夫婦生活に)、まして立ちまじるべきおぼえにしあらねば(私などはまして仲間入りできる世間体などでもないのに)、すべて今は(過去の経緯の全ては一族の血筋を引く若宮の御誕生を見た今となっては出来すぎの人生なので)、恨めしき節もなし(恨みに思うこともありません)。ただ(ただ、その実現に命を掛けた父入道の)、かの絶え

籠もりにたる山住みを思ひやるのみぞ(音信も絶って閉じ籠った寂しい山住み暮らしを思えば)、あはれにおぼつかなき(悲しく気懸かりです)」

　尼君も、ただ、「*福地の園に種まきて(豊かな土地を耕せば、きっと実が生る)」とやうなりし一言をうち頼みて(とあったような入道の遺言の一言を頼りに)、後の世を思ひやりつつ眺めゐたまへり(将来を見据えながら庭を眺め座していらっしゃいました)。　*「福地の園に種まきて」は＜「耶輸陀羅が福地の園に種蒔きて逢はむ必ず有為の都に」(出典未詳-奥入所引)＞が参照指摘され、注には＜仏典に基づく故事。『異本紫明抄』『河海抄』等が指摘するが、出典不明。＞とある。「耶輸陀羅(やしょだら)」は＜古代インドの拘利(こうり)族の王の娘で、釈迦の出家前の正妃。羅睺羅(らごら)の母。釈迦(しゃか)が悟りを開いて５年目に、五百人の釈迦族の女性とともに出家したという。ヤショーダラー。＞と大辞泉にある。だから、「逢はむ必ず」はヤショーダラーがシャカやラゴラに逢いたいと思ったことを示しているらしい。「福地の園(ふくちのその)」は＜福徳の生じる園。極楽。＞と大辞泉にあるが、明石一族にとっての＜福を生む場所＞は正にこの六条院のような気もする。「有為の都(うゐのみやこ)」は成語としての解説は見当たらず、「有為(因縁によって生じた全ての現象や事物。[古語辞典])」の「みやこ(一般に、人口が多く、政治・経済・文化などの中心となる繁華な土地。[大辞泉])」と読めば、ざっと＜実現させた晴れの舞台＞みたいな語感で、こちらが＜極楽＞かも知れない。何れ「仏典に基づく故事」であれば、どうせ、そんなようなこと、ぐらいにしか分からないが、この文には「やうなりし一言」という別の手掛かりがあるので、その「一言」を尼君に伝えて来た入道の手紙を見直してみたい。と言っても、尼君への遺言は「そこには、なほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ。明らかなる所にて、また対面はありなむ」(十一章三段)と簡略な言葉しか書かれていなかった。しかし是が、仏門者同士では＜あなたは更に滞俗して勤行に励んでください。そのように互いが役割分担して勤めれば、きっと晴れの舞台でまた会えるでしょう＞と読めた、として、その了解の意を「福地の園に種まきて(善行修行を積んで、極楽で会いましょう)」という仏門符牒のような言い回しで答えたもの、くらいに思って置く。